

服をめぐる

衣服の研究現場より

一人一品

小説家 千早茜

I7

TAKE FREE

公益財団法人
京都服飾文化研究財団（KCI）広報誌

2021.3



服をめぐる 17

一人一品

小説家×KCI収蔵品

千早茜「扇の裏」

p4

KCI Wunderkammer

帽子 p12

地産街道を行く 番外編

長浜(滋賀)

エコフレンドリー・シルク

p14

今日の補修室 第17回

補修室の七つ道具②

p20

インタビュー

ファッション関係者に聞く、

「コロナ禍で考えたこと。これからのこと。」 2

p22

お知らせ

p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「ドレス・コード? — 着る人たちのゲーム」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展、「モードのジャポニスム」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。 Website <https://www.kci.or.jp/>



「Kimono Refashioned」展(2019年 シンシナティ美術館) ©Cincinnati Art Museum. Photography by Leigh Vukov

表紙の収蔵品



Feuillets d'art 誌より

「Robe portée par M^{me} Charlotte, directrice de la Maison Premet
(メゾン・ブルメのディレクター、シャルロット夫人が装うドレス)」

出版社: Feuillets d'art 発行年: 1919年 発行地: パリ

Feuillets d'art 誌は1919年に編集者リュシアン・ボージュールによって創刊された、毎号1500部限定の豪華な芸術誌。1922年まで不定期に発刊された。美術、演劇、文学、ファッションなど幅広い芸術ジャンルをカバーし、ジャンルごとに本品のようなイラスト作品が数枚ずつ挟み込まれている。イラストレーターには、G.バルビエ、C.マルタン、G.ルバップら人気の作家が参画した。本品を描いたL.フロレスは対象物をほどよく抽象化する描き方が評判になり、Le Goût du Jour 誌を担当するなど、当時、気鋭のイラストレーターとして知られていた。

メゾン・ブルメはブルメ夫人が1909年、パリ左岸に創業したファッション・ブランド。贅沢な生地使いと新しい時代を見据えた斬新なデザインで上流階級の顧客を獲得し、1911年には高級ブランドが軒を連ねる右岸のヴァンドーム広場に店を構えるまでに急成長した。チーフ・デザイナーの交代が相次ぐなか、18年に就任したシャルロット夫人は「パリで最も美しく人目を引く女性のひとり」と称され、本品のように自らがイラストのモデルや写真の被写体になることもしばしばだった。

一人一品 小説家 × KCI 収蔵品

千早 茜

Akane Chihaya

著名人が各々の目を通し、KCIの収蔵品を語る「一人一品」。
今回のゲストは、本誌『服をめぐる』第5号（2016年）以来、二度目の登場となる作家の千早茜さんです。

千早さんは2008年、『魚神』（第21回小説すばる新人賞、第37回泉鏡花文学賞）で作家デビュー。2018年にはKCIでの取材をもとに、服飾美術館で働く補修士や芸員たちの心の葛藤や成長を描いた『クローゼット』（新潮社）を上梓されました。本書は2020年末に文庫化されています。そのほか近年では、『正しい女たち』（2018年、文藝春秋）、『犬も食わない』（尾崎世界観との共著、2018年、新潮社）、エッセイ『わるい食べもの』（2018年、集英社）、『神様の暇つぶし』（2019年、文藝春秋）、『さなかく』（2019年、祥伝社）、『透明な夜の香り』（2020年、集英社）など多数出版され、さまざまな世代から人気を集めています。

今回、千早さんが選んだKCIの収蔵品は、18世紀の女性用の豪華な扇です。本品を題材に、前作「胸中」で練り広げられた18世紀の初々しくも儂い恋愛物語の続編として新たな物語が紡がれます。



千早 茜『クローゼット』（新潮文庫）

KCIの取材がもとになった本作には、数多くの歴史的な服飾品が登場する。



『服をめぐる』第5号所収、千早茜「胸中」は下記より閲覧可能です。
https://www.kci.or.jp/publication/pdf/pr/fukuwomeguru_005.pdf



扇の裏

千早 茜

退屈が怖い。

着飾って、笑って、踊って、恋に遊んで、華やかな自由を謳歌するの。硝子が煌めく吊燭台の下で、肌や髪を飾る宝石が輝き、色とりどりの宮廷服が揺れる。楽団の調べは絶えることなく、宮殿の夜空には花火があがる。客間でのお喋り。馬車で向かう芝居や歌劇。棧敷での逢引。

私たちは光の粉を撒き散らす蝶。翅の代わりに扇をそつと震わせる。冬も蠟燭も蜘蛛も怖くはないけれど、退屈と静寂からはひらひらと逃げだす蝶たちが、そこかしこで舞っている。

でも、あなたは私を花だと言った。

従姉弟のあなたに再会したのは舞踏会だった。ひと足先に社交界に出た私は、大人の余裕を見せようとしたのに、あなたは子供の頃と変わらぬ笑顔で私に片手

を差しだして踊りに誘い、わざと速く回っては私の心臓を縮みあがらせた。「もう」と腕をつまむと、鼻をむすむずとさせた。随分と背が高くなったのに、叱られてばつが悪くなると鼻が動く癖がなおってなくて可笑しくなった。

踊り終わると、あなたはじつと私の胸元を見つめ、花の名を呟いた。胸当てには麝香撫子の刺繍があった。日に数回、毎日、毎日、侍女に脱がされては着せられる豪華な服たち。鏡台に映る自分の姿は、流行を取り入れ、華やかであればそれで良く、胸当ての刺繍の模様などもう覚えてはいなかった。

そつと窺い見ると、自分の痩せた胸が目に入った。ぎゅうぎゅうと締め上げる補正下着で肉を寄せても貧相なままの私の胸は、まだ大人には成り切れていない身体を現すようで恥ずかしくなった。

「淑女の胸元を見つめるのは失礼よ」

大人ぶってそう嗜めると、「花が花を咲かせていると思って」と言われた。澄んだ目にどきりとしたけれど、微笑み合って離れた。叱るのも、褒めるのも、戯れすべては遊び。そういう顔を、ここではしなくてはいけない。

腰から下を大きく膨らませた夜会服をゆらゆらと揺らし、友人たちが集まってくる。翅のような扇をゆったりとはためかせながら、「お茶目な方」「仲がよろし

いのね」とさざめくように笑う。

退屈が苦手な私たちは噂話が好き。面白おかしい出来事をいつだって求めている。

「ねえねえ、扇言葉を送ってはいかが？」

扇が一斉に傾く。薔薇色に薄紫、金に銀、色鮮やかな扇に描かれているのは、庭園や客間で遊ぶ着飾った貴びとの姿だ。けれど、誰も絵など見ていない。紳士たちは、淑女の手元ではためく扇の動きを見ている。閉じたり、開いたり、あおいだり、落したり、唇や心臓に当てたり。そうして、私たちは言葉を送る。それは修道院で習った神の言葉とも、山ほどの招待状に書き綴る言葉とも違う、社交界だけの秘密の言葉だ。気を引き、恋情を煽り、愛を交わし、拒絶し、別れを告げる、戯れの言葉。

扇の先端を左頬に当てる。これは、いいえ、の扇言葉。いまにも片手を差しだしてこようとしている縞の紳士服の男性に送る。私はそんなにたくさんは踊れない。

「あの方は、従姉弟なの」

違う女性に踊りを申し込むあなたの後ろ姿を、息を整えながら眺めた。細かな草花の刺繍で覆われた紺碧の紳士服は、あなたの白金の髪に良く似合っていた。これからこの社交界で、あの刺繍の数だけ恋の花を咲かせるのだろう。私の夫の

ように。

そう思うと、微かに胸が痛んだ。血の味のする咳が、喉の奥にせり上がってくる。なんとか呑み込み、歪んだ顔を扇で隠す。

扇は言葉を贈り、見せたくないものを隠すもの。嫉妬や苦痛や不安や陰鬱や悲しみは、優雅で洗練された紳士淑女には不要なものだから、覆い隠してしまう。私たちは自由な享樂をなにより好む。

でも、本当は自由の意味なんて知らない。

しきたりや作法を守り、目が覚めないように退屈を退け、夢の日々を遊び続けているだけ。それが貴びとたちの嗜みだから。

扇言葉も秘密なんかではない。皆、意味など知っているのだから。隠したふりをする恋の遊戯^{ゲーム}。誰もが複数の愛人を持ち、快樂で人生を彩る。

舞踏会の後、あなたからの贈り物が届いた。薄紙に包まれていたのは、若々しい翠玉色の扇だった。あなたの好きな狩りの絵が描かれ、骨は繊細な彫りの施された真つ白な象牙でできていた。古くからいる侍女が「まあ」と声をあげる。

「お嬢さまの瞳と同じ色」

鏡に映る、まだ白粉も頬紅も塗られていない顔は青白く、唇はかさついて色が



千早さんが選んだ収蔵品

扇

1740～50年頃 フランス製？
京都服飾文化研究財団所蔵 成田舞撮影

紙製の扇面には狩猟風景のほか上流階級の暮らしの一場面や植物、また象牙製の骨には動植物が手描きで表現されている。18世紀の典型的な形で、柄の細かな彫刻や扇面の精緻な筆致など、随所に贅が尽くされている。15世紀から16世紀にかけてアジアからヨーロッパにもたらされた折りたたみ式の扇は上流階級の間で流行となり、17世紀にはフランスをはじめヨーロッパ各地で生産されるようになった。18世紀中期になるとフランス製の扇はもっとも洗練された服飾アイテムのひとつとして人気を博した。このタイプの扇は、扇面の表面に細かな意匠が施され、裏面はシンプルであることが多い。18世紀の社交界では扇を用いた「扇言葉」が流行した。これは扇の閉じ方や持ち方によって相手に暗黙のうちに心情を伝える方法であった。

扇の裏
千早茜

ない。髪にも肌にも艶がない。夜な夜な繰り広げられる宴の後は、疲れた身体だけが残る。瞳の色だけが幼い頃と変わらない。扇で素顔を隠すと、裏が見えた。赤い花が一輪、描かれていた。

昔、あなたが摘んでくれたような、名も知らぬ野の花。

あなたは私を正気にさせる。嘘ばかりの華やかな戯れから、目を逸らさせようとする。

だから、あなたに扇言葉は贈らない。

たったひとつの真を扇の裏に隠して、紅を塗った唇で笑い続ける。

そうしなければ、きっと、退屈よりもっと怖いものに堕ちてしまうから。





帽子

素材：絹、樹脂、スチール
 原産地：ヨーロッパ
 製作年：1950年代

ここに小さな植物の世界が広がっている。苔、小枝、花のつぼみ、そして軟体動物にも見えるスメツとしたもの…。まるで森の奥深きのよう。しかし、これは森のなかでも流行りのテラリウムでもない。頭上の飾りだ。1950年代、頭にちょこっと乗せる小さな帽子が流行した。その形や素材は多種多様で、自然界のモチーフも積極的に取り入れられていた。草花はもちろんのこと、貝やサンゴなどの海の生物も…。本品の銀光りしているものはナメクジを模しているのだろうか。湿度すら感じさせる頭上の世界に、当時の人々の目は釘付けになったことだろう。(筒井)



参考／『VOGUE(フランス版)』1954年11月号より。エレガントな装いには小さな帽子が必須だった。



クラウン(かぶる部分)やブリム(つば)がないこのタイプの帽子は不安定なので、内蔵されたコーム(くし)を髪にさして安定させることが多い。

珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫
 —そこはまさに「驚異の部屋」。

長浜（滋賀）エコフレンドリー・シルク



近年、環境問題に関するニュースを目にする機会がますます増えた。もし新型コロナウイルス感染症が世界に蔓延していなければ、もつとたくさんの話題が世界中で共有されていたことだろう。大気汚染、干ばつ、山火事、巨大台風、豪雨…。こうした災害のほとんどは人間の活動が原因とされ、早急な対策が求められている。

様々な産業のなかで繊維業界は環境負荷が最も大きい産業のひとつと言われる。生産、輸送、廃棄などあらゆるプロセスにおいて、繊維製品は工程や物量が多く、輸送距離も長い。そのため環境問題の矢面に立たされやすい。そんななか、世界中のアパレルメーカーが環境問題への取り組みを表明し始めた。ある大手ファストファッションメーカーは、全商品への再生可能繊維の使用を2030年までに完了すると決めた。再生可能繊維とはペットボ

①長浜からの琵琶湖の眺め。



トルなどの廃棄物から再生された化学繊維を指す。環境汚染物質を削減しつつ循環型生産を目指す企業はこれからも増えることだろう。

本誌の「地産街道を行く」は、KCIの収蔵品にみられる素材や技術を紐解くために、各地の生産者を訪ね、その様子を見聞する内容だ。昨秋、これまでの取材先の一社、「吉正織物工場」から「このたび、環境に配慮したエコフレンドリーな生地を開発しました」という知らせが届いた。「吉正織物工場」は、滋賀県長浜市で高級絹織物のひとつ縮緬織（ちぢみ）の製造を手掛ける老舗生地メーカーだ。その生地は縮緬織特有の表面のシボがきめ細かく、しつとりと柔らかい。絹織物なのでもちろん天然繊維の絹で出来ている。この上質な生地に、果たして「環境に配慮すべきこと」がどの程度あるのだろうか…。それが知らせを受け取った最初の印象だった。というのも、2018年に伺った同社の工場で、ローテクでクリーン、そして丁寧な少量製造の過程を見ていたので、アパレルメーカーが直面している環境問題対策とは無縁だと感じていたからだ。

そこでこの取り組みの詳細を知るため、同社の吉田和生社長にオンライン・インタビューを行うことにした。

②「吉正織物工場」の《浜ちりめん》。
縮緬織特有の美しいシボが見える。

環境にやさしい製造工程の開発

KCI ご無沙汰しております。環境に配慮した新しいプロジェクト「Necos」を開始されたと聞きました。今日はその内容について伺いしたいと思います。

吉田氏 お久しぶりです。この「Necos」は、「長浜エコフレンドリーシルク」を略したものです。単一の商品名ではなく、このたび開発した新技術を製造工程のなかで使って生産した生地につける名称なんです。

KCI 以前、取材の折に、生地の製造は30工程以上あると伺いました。糸製作から織り上げまで一貫製造しておられる工程のうち、この新技術はどのあたりの工程で使われる技術なのでしょう？

吉田氏 最後の方の工程に「精練^{せいれん}」があります。「Necos」は、その工程で生じる化学的処理を環境に配慮した方法に変えられないかと試行錯誤して開発した技術です。

KCI 「精練」といえば、絹糸に残ったセリシンという物質を取り除く作業でしたね。この工程で生地がより滑らかになると伺いました。

吉田氏 はい。この工程がないと美しい生地にならないので、とても重要です。この工程ではソーダ灰という炭酸ナトリウムを含んだ

溶剤を使います。これは有害というわけではないですが、長い目でみれば環境に良くない。そこでソーダ灰に代わる自然由来のものを開発できないかと考えたんです。

KCI 「精練」の工程に化学的な処理があったのですか。開発に取り組もうと思われたきっかけはあったのですか？

吉田氏 はい、ありました。私たちの生地はこれまで着物向けに製造してきましたが、近年の着物の需要の落ち込みで、それならば洋服に使ってもらおうと海外への売り込みに挑戦し始めたところ、よい反応を頂くことが出来ました。2018年から何度かパリやミラノの高級ブランドを中心に訪問して商談を行った際、ある外国の方から「環境への取り組みはどの程度しているのですか？」と問われたんです。ハッとなりました。ヨーロッパは環境問題への取り組みが進んでいると聞きましたが、うちのようなロット数の少ない天然素材の生地でさえ、環境への配慮が求められるのだ、と。

KCI それは驚きですね。そうした取り組みは、大規模なアパレルメーカーや商社が陣頭指揮を執るのだと思っていました。

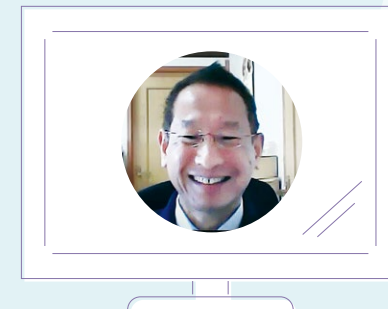
吉田氏 私も最初は戸惑いましたけど、挑戦することにしました。自然由来の精練用水はどうすれば出来るのか。そこで目を付けたのが、化学的処理が導入される以前の昔の方法でした。それが薬や木を燃やして出る植物由来の灰なのですが、これを効率的に復活でき



⑥精練後、シリンダーで生地を乾燥させる。



④・⑤ 精練の作業工程。海外のメーカーに使ってもらいやすいよう広幅の生地の生産を始めた。



③ (有)吉正織物工場社長、吉田和生さん。
2021年1月25日、オンラインインタビューにて。



⑦「八丁水撚り撚糸」の工程。糸が切れないように水をかけながら糸を撚っていく。使用する水は伊吹山からの伏流水（地下水）。



⑧《浜ちりめん》の反物を手に特徴を話す吉田社長。
その品質は海外からも高く評価されている。（2018年の取材時）

取材にご協力頂いた企業・団体（敬称略）

● 有限会社 吉正織物工場

〒526-0014 滋賀県長浜市口分田町 629
TEL 0749-6211790
URL <https://yoshinasa-ori-mono.jp/>

『服をめぐる』第10号所収、「長浜（滋賀）浜ちりめん」は
こちらのURLより閲覧可能です。
https://www.kci.or.jp/publication/pdf/py/fukuwomeguru_010.pdf



ないかと思つたのです。

KCI 御社が独自に研究をされたのですか？

吉田氏 地元の滋賀県東北部工業技術センターと共同で研究を進めました。剤の分量、浴比、方法が全く分からなかったため、実験室での研究が数か月続きましたが、精練にかかるコストを化学的処理と同じくらいで出来るところまでたどり着きました。今、この技術の特許申請しているところです。

琵琶湖の水を守るために

KCI 以前、精練には大量の水が必要と伺いました。

吉田氏 そうなんです。私たちの生地製造は地下水に頼っています。伊吹山から琵琶湖方面へ流れている伏流水である地下水は、糸製作時の八丁水撚り撚糸には欠かせません。精練では、琵琶湖の沖合の深いところから取水配管パイプで水を取水して琵琶湖の水そのものを使っています。精練に適した超軟水なのです。そして、ここで使った水は最終的に琵琶湖へと流れていきます。滋賀の人々は琵琶湖を「マザーレイク」として大切にしてきました。しかし近年、琵琶湖の水質が変化し始めたらしく、とても心配しています。

KCI ニュースで見たことがあります。冬季に湖水の上層と下層の循環が起こるはずが、最近はその循環が鈍いとのこと。

吉田氏 はい。上層と下層が入れ替わることで湖底にも酸素が行き届き、生態系が維持できてきたのですが、それが起こらないと琵琶湖の水質が変わってしまいます。この原因はやはり地球温暖化と言われているんです。

KCI 温室効果ガスである二酸化炭素排出量が関係しているのですね。

吉田氏 ええ。私たちが精練の工程をこの新技術で行った場合、生地200㎡あたり約102kgの二酸化炭素排出量を減らすことができました。環境への負荷が少なく、琵琶湖の水を大切にすることの取り組みが、将来的に琵琶湖の水質保全に繋がると信じています。

KCI なるほど。地域の自然の恵みを受けて、その地域ならではの製品を作る。そして使ったものは汚さずに自然へ返す。そういう循環を創り出すことが大切なのですね。「NecoS」の生地の魅力が世界中の人々に伝わることを願っています。本日はありがとうございました。

インタビュー・文 筒井直子
写真①③⑥ 福嶋英城
写真④⑦ 吉正織物工場

今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第 17 回

補修室の七つ道具②

マネキンの
美容師さんです♡



Step

01

参考図版を選ぶ

参考とするファッション・プレートを選びます。



『Le mercure des Salons』誌
1830年より

今回は、18～19世紀頃の衣装をマネキンに着せて展示する時、ヘアーをどのように作っているのかご紹介しましょう。

衣装が着られていた当時のファッション・プレート (01) を見てイメージを固め、制作に取りかかります。まず市販の白い画用紙を1～3cm幅の帯状に切ります。それらを三つ編みにしたりカールさせたり、丸めてシニョンにしたりして (02)、マネキンの頭部に両面テープやグルーガンで貼り付けて形作っていきます (03)。

この手法は、KCIがこれまでに手掛けた「華麗な革命」展 (1989年) や「浪漫衣装展」 (1980年) など18世紀、19世紀をテーマとした展覧会での展示経験がもととなり、補修室でアレンジして今の形になりました。KCIでは、あまりにリアルなマネキンは生々しくなってしまうので好みません。髪型も同様で、人毛や人工毛ではなく紙で作ることで、逆に見る人の想像力を高めるようにしています。

最近では海外の美術館でも紙で作ったヘアーを用いて当時を表現しているところが増えたように思います。衣装の展覧会に行ったら、マネキンのヘアーにも注目してみると面白いかもしれません。(藤井久子)



1830年代のディ・ドレスとヘアーの着装例
京都服飾文化研究財団所蔵、広川泰士撮影

七つ道具その②

マネキンのヘアー

画用紙で様々な形を作り、多様で華やかだった18～19世紀の髪型を表現します



Step

03

貼り付ける

02で作ったパーツをマネキンの頭部に貼り付け、ヘアーを整えて完成です。



Step

02

パーツを作る

画用紙を帯状に切り、カールをさせたり輪っかにして繋げたりして、パーツを作っていきます。



井上 雅人

武庫川女子大学准教授

服と本のセレクトショップ「コトバトフク」の運営にも携わる。著作に『洋服と日本人』(廣済堂出版)、『洋服文化と日本のファッション』(青弓社)、『ファッションの哲学』(ミネルヴァ書房)。



廣田 理紗

島根県立石見美術館 主任学芸員

北海道大学大学院文学研究科修士課程修了。2009年3月より島根県立石見美術館に勤務。同美術館ではファッションを担当。企画した展覧会に「森英恵 仕事とスタイル」(2015)、「コズミックワンダーと工芸ばんくす舎 お水え いわみのかみとみず」(2016)、「コズミックワンダー 充溢する光」(2017)、「THERIACA 服のかたち/体のかたち」(2018)、などがある。



ファッションはこれからどうなってしまうのでしょうかと、とにかく尋ねられた一年でした。産業の縮小や好機、これからの服など、質問の意図もまちまちで、いろんな聞き方をされました。ストリートファッションはどうなるのか、という面白い質問もありました。なるほど、ストリートから人が消え、マスクなしの顔を眺める

のがもつぱら画面の中では、ストリートファッションが消えてしまふと危惧するのももつともです。ただ、どんなにヴァーチャルな空間での作法を身につけても、私たちはリアルな身体無しでは生きていけません。ウイルスが宿るのも身体です。この一年は、社会にとって身体との出会い直しの一年でもありました。そして身体がある限り、身体を社会的な存在に構成する技術として、ファッションは無くなりません。今は、その技術を社会全体で苦悶しつつ、更新していく時期なのでしょう。

コロナが世の中を変えて、自分の身に起こったことで最も心に残っているのは、美術館を臨時休館しなければならなかった日のこと。館の外に張り出す「休館中」の表示を、私たちは手作りした。安価な化学素材のダンボールに、カッティングシートで字を貼った。それを学芸のメンバーみんなで貼り出した。きちんとデザインされた看板の上に、安普請だけ大丈夫でこの上なくわかりやすい表示を、べったりと貼った。心底悲しかった。どう言ったらよいかかわらないけれど、何か大事なものが切れたようなかんじがした。現在は感染拡大防止対策をした上で開館している。いまの状況と照らし合わせば、あの臨時休館なんかしなくて全然よかったよね、と思う。あの時正しかった判断が、今日はまったく違う、という世の中になった。これからもまだ続きそう。試されるなあ、と思う。

ファッション関係者に聞く、

「コロナ禍で考えたこと。これからのこと。」2



2021年にはいっても、未だコロナ感染症の世界的蔓延が続いています。そんななかで、ファッション関係者たちは日々、何を考え実践されているのでしょうか。今号では前号に引き続きファッションデザイナーや、教育関係、美術館関係の方々からお話を伺いました。

昨

年のSTAY HOME期間、在宅時間が増え、机に向かい椅子に座り、過去に訪れた場所の写真を見返したり、詩集や画集を読み返したり、近所を散歩したり、という日々を過ごしていました。そこで、気になり出したのは、いま座っている椅子の座り心地を良くしたいとか、身体のを整えたいとか、丁寧なスキンケアを心がけようという単純にフィジカルなライフスタイルの改善や整頓でした。また日頃より、私が

malamuteの服を着ていて感じるものがその行為と同じように気になってきました。本棚にあったアンリ・マティスの切り絵集『BLUE NUDE』からヒントを得て、服と身体の関係を考え直す時間になりました。特に21SSシーズンは無縫製のホールガーメント

シリーズに注力しました。当初から1シーズンではなく何年後もその人のワードローブに残るようなモノをデザインしたいと考えていますが、こういった状況で、さらに1点を産地の工場や職人の方と制作工程も含めた細やかなデザインを心がけています。新しいもののづくりの可能性と語り継がれる技術のアップデートを皆様へ丁寧にお届けできるように考えています。



小高 真理

ファッション・デザイナー

埼玉県生まれ。2011年文化ファッション大学院大学卒業。ニットデザイナーとして経験を積んだ後、2014A/Wよりmalamuteスタート。2017年東京都新人デザイナー大賞受賞。

2019S/S CollectionよりAmazon Fashion Week TOKYOにてランウェイショー形式にて発表。『強さと柔らかさを併せもつ現代女性のためのライフウェア』をコンセプトに、国内の職人、工場と生み出す精緻なニット表現が特徴。ニットならではのテクスチャーやフォルムを活かしたもののづくりで相反するガーリッシュな甘さと大人の落ち着きが混在するニューエレガンスを提案している。

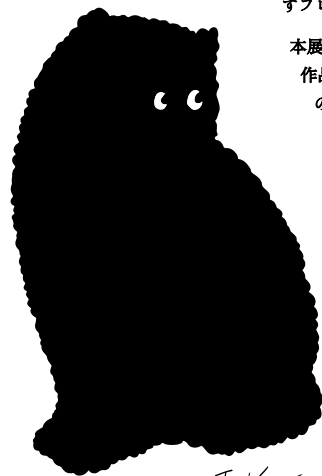


たかしまかずあき

高島一精の個展

「This is not a cat. : 夜の動物園」を開催します

高島氏は、黒猫のキャラクター「にゃー」で知られるファッションブランド「Né-net」のデザインを手がけていた2019年、イラストを中心にした個展「This is not a cat.」を開催。独立後の2020年の個展ではウェアラブルなイラスト作品である「TIE」を発表し、さらにInstagramを通して顧客と対話しながら服や小物を受注生産するなど、着る人たちとのつながりを重視しながら、活動の幅をひろげています。今では「This is not a cat.」は、彼の一連の活動を示すフレーズとなりました。



© Kazuaki Takashima

本展はこうした高島氏の作品を展示する、関西初の機会となります。作品保護のためにいつも薄暗いKCIギャラリーで彼が想像した「夜の動物園」という設定のもと、不思議な動物たちのイラスト作品に加え、それらをモチーフにしたマスクや新作の服を展示します。逃げ出した動物たちがどこに潜んでいるのか、「夜の動物園」になぞらえたKCIギャラリーで探してみてください。

- 会 期 2021年4月22日(木)～7月30日(金)
 開館時間 午前9時30分～午後5時
 休 館 日 土・日・祝(ただし、7月19日(月・祝)は開館)、
 7月22日(木)、7月23日(金)
 *新型コロナウイルス感染症対策のため、
 会期変更や休館の可能性あります。
- 会 場 KCIギャラリー
 〒600-8864 京都市下京区七条御所ノ内南町103
 ワコール京都ビル5F
- 入 場 料 無料

*本展は完全予約制です。予約方法、新型コロナウイルス感染症への対応についてはKCIホームページにて告知いたします。
 * KCI ギャラリーでは作品の販売は行っていません。

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第17号
 2021年3月30日発行

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)
 〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
 株式会社ワコール京都ビル内
 電話：075-321-9221

ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福岡英城、松坂雅子(京都服飾文化研究財団)
 デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子(Neki inc.)
 写真：成田舞 (Neki inc.)

編集後記

この一年、あちこちの美術館・博物館の展覧会が開幕延長を余儀なくされてきました。そのなかのひとつ、「ファッション イン ジャパン1945-2020ー流行と社会」展がいよいよ3月に開幕します。KCIも本展に多数の収蔵品の貸出し協力を行っていますので、ぜひ会場でご覧ください。

会場(会期)
 島根県立石見美術館 (2021年3月20日～5月16日)
 国立新美術館 (2021年6月9日～9月6日)
 詳しくは URL <https://fj2020.jp> をご覧ください。